

# 大学生を対象としたシッティングバレーボール体験の効果検証

—— 身体障がい者イメージの変容に着目して ——

岡田 悠佑<sup>1)</sup> 金沢 翔一<sup>2)</sup> 根本 想<sup>3)</sup>  
乳井 勇二<sup>4)</sup> 鈴木 康介<sup>5)</sup>

## The Verification of Effectiveness of Sitting Volleyball Experience for College Students:

Focusing on the Transformation of the Image of People with Physical Disabilities

Yusuke Okada Shoichi Kanazawa So Nemoto  
Yuji Chichii Kosuke Suzuki

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the effect of sitting volleyball experience on the “image of persons with disabilities” of university students. At that time, “gender” and “experience of contact with persons with disabilities” were set as analysis viewpoints as well as before and after the practice.

As a result, it was confirmed that the image of “social disadvantage” decreased before and after the practice, and the factors were that the evaluation of the ability of persons with disabilities increased through the sitting volleyball experience and the skill level required for the sitting volleyball experience was appropriate. On the other hand, it was concluded that the relationship between the change in “image of persons with disabilities” and “gender” and “experience of contact with persons with disabilities” does not affect the change in “image of persons with disabilities”.

As the future tasks, this study indicated that the development of a program for “sports experience for persons with disabilities” that changes the image of “respect” and “compassion” and the analyzing the effect from the viewpoint of differences in skill levels and “contact with persons with disabilities”. It is also necessary to examine the effect of “sports experience for persons with disabilities” from the viewpoint of analysis based on the qualitative difference of “experience”.

Key words: inclusive society, Paralympic education, Para-Sports activity, sitting volleyball,

Social Disadvantage

キーワード：共生社会，パラリンピック教育，障がい者スポーツ体験，

シッティングバレーボール，社会的不利

- 1) 早稲田大学スポーツ科学学術院
- 2) 山梨大学教育学部
- 3) 育英短期大学現代コミュニケーション学科
- 4) 日本体育大学総合スポーツ科学研究センター
- 5) 中部学院大学スポーツ健康科学部

## I 緒 言

### 1 東京パラリンピック競技大会を契機とした「心のバリアフリー」の実現

現在、日本では、東京パラリンピック競技大会（以下、「東京パラ大会」）の開催を契機に障がい者等のこれまで十分な社会参加の機会が与えられてこなかった人々が社会活動に積極的に参加する共生社会<sup>1</sup>の実現が目指されている。具体的な指針である「ユニバーサルデザイン 2020 行動計画」では、東京パラ大会を「共生社会の実現に向けて社会の在り方を大きく変える絶好の機会」（内閣官房, 2017, p.1）と位置づけ、学校教育において「心のバリアフリー」の教育を展開することが示されている。ここで言う、「心のバリアフリー」とは、「様々な心身の特性や考え方を持つすべての人々が、相互に理解を深めようとコミュニケーションをとり、支え合うこと」（内閣官房, 2017, p.5）を意味する。そして、このような「心のバリアフリー」の実現には、障がいの社会モデル<sup>2</sup>を理解すること、障がい者（及びその家族）への差別を行わないこと、障がい者を含む多様な他者とのコミュニケーション能力を養い困難や痛みを想像し共感する力を培うこと、の3点が重要である、と示された。つまり、健常者が障がいに伴う困難や障がい者との接し方を身に付ける障がい理解が求められている。

### 2 「障がい者スポーツ体験」に関する先行研究の批判的検討

このような障がい理解を促進するための方策として、体育・スポーツ関係の取り組みの中で注目されてきたのが「障がい者スポーツ体験」<sup>3</sup>である。例えば、東京パラ大会に向けて「さまざまな障害を有する者に対するステレオタイプな考え方からの脱却を図り、障害を含めた違いを超えた人々の交流や共同学習を充実させること」（有識者会議, 2016, pp.13-14）を目的に行われているパラリン

ピック教育（以下、パラ教育）の取り組みでは、東京都の「スマイルプロジェクト」（東京都教育委員会, online）や日本財団パラリンピックサポートセンター（以下、パラサポ）の「あすチャレ！スクール」（パラサポ, online）等があげられる<sup>4</sup>。このような日本における「障がい者スポーツ体験」に関する先行研究<sup>5</sup>を概観すると、主に障がい者を社会生活上の困難を抱えている心理的に遠い存在と捉えている（石川ほか, 2008）と言われる大学生を対象に、「障がい者スポーツ体験」を含む障がい者スポーツに関する授業が障がい理解に与える効果の検討が行われてきた。研究方法としては、「障がい者イメージ」や「障がい者スポーツに対する意識」に関する質問紙調査が採用されており、分析視点としては「時間（事前／事後）」だけでなく、「性別（男／女）」、「障がい者との接触経験（有／無）」、「障がい者スポーツ経験（有／無）」、「実践形式（講義／体験）」も設定されている。そして、全ての先行研究において、実践前後で大学生の「障がい者イメージ」や「障がい者スポーツに対する意識」が肯定的に変化した、という結論が示されている。他方で、「性別」による差異に関しては、安定的な結果は示されていない<sup>6</sup>。また、「障がい者との接触経験」に関しては、接触経験がない方が障がい者をより困難を抱えている存在として認識することが示されている（内田・大谷, 2013）。さらに、実践形式（講義／体験）に関しては、障がい理解への効果の差異はないことが示されている<sup>7</sup>（角田ほか, 2018）。

しかし、これらの大学生を対象とした「障がい者スポーツ体験」の効果に関する先行研究は、「障がい者スポーツ体験」として複数の種目や活動を組み合わせたプログラムや、「障がい者スポーツに関する講義」と「障がい者スポーツ体験」を組み合わせたプログラムが行われていることから、具体的な実践内容と効果の関係が不明瞭である。また、自作の質問紙を採用していることから、データの妥当性も低いと言わざるを得ない。その

ため、データの妥当性を担保できる質問紙を活用し、より具体的な実践内容に基づいた効果検証を行う必要がある。

### 3 シッティングバレーボールへの着目

大学生を対象とした「障がい者スポーツ体験」の具体的な種目を選定する際には、正式な用具の準備、安全面への配慮、公式なゲームに近い形式での実施といった条件を満たすことが必要である(永浜・藤村, 2011; 佐藤, 2012; 角南ほか, 2014)。そこで本研究では、用具の準備は健常者が行う類似したスポーツのもので代替できることから容易であり、安全面への配慮が可能で、さらに高等学校卒業までに基本的な技術を習得していることが見込まれるからゲームが成立する可能性が高いシッティングバレーボールを採用した<sup>8)</sup>。

### 4 目的

本研究では、シッティングバレーボール体験が大学生の「身体障がい者イメージ」に与える効果を明らかにすることを目的とした。その際、前述の先行研究を参照し、時間(事前/事後)に加えて「性別」及び「障がい者との接触経験」を分析視点として設定した<sup>9)</sup>。

なお、東京大会に向けた有識者会議において「大学生に対するオリンピック・パラリンピックに関する教育が幅広く行われることが期待される」(有識者会議, 2016, p.16)と指摘されていることから、大学生を対象に「障がい者スポーツ体験」を行い、その効果を詳細に検討することは重要な課題である。

## II 方法

### 1 対象

本研究では、A大学の学生34名(1年生)、B大学の学生14名(2年生)の計48名を対象とした。本研究で設定した分析視点に基づく対象者の

内訳は、表1の通りである。

表1 対象者内訳

|    |   | 接触経験 |    |    |
|----|---|------|----|----|
|    |   | あり   | なし | 計  |
| 性別 | 男 | 14   | 8  | 22 |
|    | 女 | 20   | 6  | 26 |
|    | 計 | 34   | 14 | 48 |

### 2 実践内容

本研究で採用したシッティングバレーボール体験は、A大学で3回(2018年7月18日、2019年7月24日、2020年7月29日)、B大学で1回(2018年5月22日)の計4回実施し、参加者はいずれかの実践に1回参加した。実践の時間は90分間で、内容は以下の通りである。

表2 シッティングバレーボール体験の実践内容

| 時間(分) | 内 容                           |
|-------|-------------------------------|
| 10    | ルールの確認                        |
| 10    | 座位での移動練習                      |
| 20    | 座位でのパス練習<br>(オーバーハンド、アンダーハンド) |
| 20    | パスでのラリーゲーム                    |
| 30    | ゲーム(3対3)                      |

### 3 データの収集方法

本研究では、シッティングバレーボール体験が大学生の「身体障がい者イメージ」に与える効果を明らかにするために、「身体障害者イメージ尺度」(栗田・楠見, 2010)を採用した。この尺度は、大学生を対象とした調査に基づいて作成されたものであり、「身体障害者イメージ」の中核とされる3因子(社会的不利、尊敬、同情)に関する17個の質問項目で構成されている。なお、回答は7件法で求めた。また、「性別」及び「障がい者との接触経験」の有無に関しては、フェイスシートに記入を求めた。

### 4 分析方法

データの分析方法は、質問項目への回答を「とてもそう思う=7点」、「そう思う=6点」、「やや

そう思う＝5点]、「どちらとも言えない＝4点]、「ややそう思わない＝3点]、「あまりそう思わない＝2点]、「そう思わない＝1点]として得点化し、各因子の平均値を算出した。そして、実践の前後での変化を検討するために、SPSS ver.25を用いて事前×事後の対応のある*t*検定を行った。さらに、実践の前後での変化と「性別」及び「障がい者との接触経験」の関係を検討するために、「時間(事前/事後)×「性別(男/女)」及び「時間(事前/事後)×「障がい者との接触経験(有り/無し)」の二要因分散分析を行い、交互作用が認められた場合は、Bonferroni法による単純主効果検定を行った。

## 5 倫理的配慮

授業を行う前に、本研究の目的を伝えアンケート調査への協力を依頼した。その際、アンケートへの回答は強制ではないこと、個人が特定されることはないこと、そして研究以外の目的で使用しないことを伝え、匿名で回答を求めた。

## III 結果及び考察

### 1 実践前後での変化

まず、「障がい者スポーツ体験」による「身体障がい者イメージ」の変化を検証するために、シッティングバレーボール体験の前後で収集したデータに対して対応のある*t*検定を実施した。その結果、表3の通り、「社会的不利」イメージのみ有意な変化が見られた。

表3 実践前後での変化 (n=48)

|       |      | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>t-value</i> |
|-------|------|----------|-----------|----------------|
| 社会的不利 | pre  | 4.65     | 1.04      | 3.49 **        |
|       | post | 4.06     | 1.33      |                |
| 尊敬    | pre  | 5.18     | 1.35      | -0.19          |
|       | post | 5.22     | 1.42      |                |
| 同情    | pre  | 3.52     | 1.28      | 0.82           |
|       | post | 3.36     | 1.43      |                |

\**p* < .05, \*\**p* < .01

このような実践の前後での「社会的不利」イメージの有意な低下は、学生がシッティングバレーボール体験を通して、身体障がいの事実に基づく困難さやその事実により被る不利・不便に関するイメージが低下したことを意味する。そして、このような変化の要因としては、藤田(2003)や永浜・藤村(2011)等が指摘している通り、「障がい者スポーツ体験」において障がい者の困難を経験したことで、障がい者の能力に対する評価が高まったと考えられる。さらに、Campos et al(2014)が指摘する通り、障がい者スポーツ体験における過度な競争が障がい者スポーツに対する否定的なイメージを生み、結果的に「身体障がい者イメージ」の肯定的な変化を阻害することも考えられるが、上述の結果は本研究で採用したシッティングバレーボール体験が参加者の技能レベルに適していた可能性が考えられる。ただし、この点を詳細に検討するためには、技能レベルの差を分析視点に設定したり、障がい者スポーツの他の種目を採用したプログラムを作成して比較検証することが求められる。

### 2 「性別」及び「障がい者との接触経験」に基づく変化の差異

次に、「障がい者スポーツ体験」による「身体障がい者イメージ」の変化と「性別」及び「障がい者との接触経験」の関係を検証するために、「時間」×「性別」及び「時間」×「障がい者との接触経験」の二要因分散分析を行った結果、表4及び表5の通り、全ての因子において交互作用は確認できなかった。

つまり、本研究では、「性別」及び「障がい者との接触体験」は「身体障がい者イメージ」の変化に影響を与えない、という結果となった。「性別」に関しては、前述の通り先行研究において見解が分かれており、本研究は曽根(2016)の結果を支持する結果となった。また、「接触体験」に関しては、先行研究において「障がい者との接触

表4 「時間」×「性別」の二要因分散分析の結果 (n=48)

| 性別<br>時間 | 男性 (n = 22) |      |      |      | 女性 (n = 26) |      |      |      | 主効果  |       |      |
|----------|-------------|------|------|------|-------------|------|------|------|------|-------|------|
|          | pre         |      | post |      | pre         |      | post |      | 性別   | 時間    | 交互作用 |
|          | M           | SD   | M    | SD   | M           | SD   | M    | SD   |      |       |      |
| 社会的不利    | 4.58        | 1.11 | 3.80 | 1.42 | 4.70        | 1.00 | 4.28 | 1.23 | 1.46 | 6.11* | 0.56 |
| 尊敬       | 5.21        | 1.52 | 5.03 | 1.76 | 5.17        | 1.22 | 5.38 | 1.08 | 0.30 | 0.01  | 0.46 |
| 同情       | 3.60        | 1.29 | 3.33 | 1.63 | 3.44        | 1.29 | 3.38 | 1.27 | 0.04 | 0.35  | 0.15 |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表5 「時間」×「接触経験」の二要因分散分析の結果 (n=48)

| 接触経験<br>時間 | あり (n = 34) |      |      |      | なし (n = 14) |      |      |      | 主効果  |       |      |
|------------|-------------|------|------|------|-------------|------|------|------|------|-------|------|
|            | pre         |      | post |      | pre         |      | post |      | 接触経験 | 時間    | 交互作用 |
|            | M           | SD   | M    | SD   | M           | SD   | M    | SD   |      |       |      |
| 社会的不利      | 4.52        | 1.15 | 4.08 | 1.33 | 4.96        | 0.66 | 4.00 | 1.37 | 0.46 | 6.74* | 0.95 |
| 尊敬         | 5.07        | 1.47 | 5.37 | 1.31 | 5.45        | 0.99 | 4.86 | 1.66 | 0.05 | 0.23  | 2.04 |
| 同情         | 3.38        | 1.31 | 3.41 | 1.48 | 3.84        | 1.19 | 3.23 | 1.34 | 0.21 | 0.89  | 1.08 |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

経験」がある方が障がい者をより困難でない存在として認識するようになることが示されてきたが、本研究では「身体障がい者イメージ」の変化と「障がい者との接触経験」の関係は確認できなかった。ただし、本研究では、永浜 (2012) 及び内田・大谷 (2013) を参照し「障がい者との接触経験」を「ある/ない」の二択で分類したため、「障がい者との接触経験」の質の差異を考慮できていない。そのため、これまでに障がい者とのような関わりがあったのか、という点を詳細に検討し、「身体障がい者イメージ」の変化との関係を検討することが求められる<sup>10</sup>。

#### IV まとめ

本研究は、シッティングバレーボール体験が大学生の「身体障がい者イメージ」に与える影響を明らかにすることを目的とした。その際、分析視点として実践の前後だけでなく「性別」及び「障がい者との接触経験」を設定した。その結果、実践の前後において「社会的不利」イメージの減少

が確認でき、その要因としてはシッティングバレーボール体験を通して障がい者の能力に対する評価が高まったこと及びシッティングバレーボール体験で求められる技能レベルが適切であったことが考えられた。他方で、「身体障がい者イメージ」の変化と「性別」及び「障がい者との接触経験」の関係については、どちらも「身体障がい者イメージ」の変化に影響を及ぼさない、という結論が示された。今後の課題としては、本研究で効果が確認できなかった「尊敬」及び「同情」イメージの変化を引き起こす「障がい者スポーツ体験」のプログラムの開発や、技能レベルの差異及び「障がい者との接触経験」の質的な差異を分析視点とした「障がい者スポーツ体験」の効果の検討が求められる。

#### 〈注〉

- 1 「共生社会」とは、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」(文部科学省, online) を意味する。

- 2 障がいの社会モデルとは、「障害を個人の属性ではなく、社会の障壁としてとらえる」(杉野, 2007, p.5) 考え方である。
- 3 「障がい者スポーツ」に類似する概念として「アダプテッドスポーツ」、「パラスポーツ」があるが、先行研究においてこれらの概念は明確に区分されていないことから、本研究では全て「障がい者スポーツ」で統一して表記する。
- 4 「スマイルプロジェクト」とは、「障害者スポーツの観戦・体験、スポーツを通じた特別支援学校と地域の学校等との交流などを通し、子供たちが、お互いの人格や個性について理解を深め、思いやりの心を育成する取組」(東京都教育委員会, online) である。「あすチャレ! スクール」とは、パラアスリートを講師として招聘し、講演や実技体験を行うプログラムである(日本財団パラリンピックサポートセンター, online)。
- 5 先行研究は、論文検索サイト「CiNii」を活用し、「障がい(害)者スポーツ体験」及び「アダプテッド・スポーツ体験」を検索ワードとして探索を行った。
- 6 「性別」による「障がい者イメージ」の変化の差異に関しては、女性のほうが変化が大きいという指摘(吉岡・内田, 2009)、男性のほうが変化が大きいという指摘(永浜, 2012)、そして「性別」による差異はないという指摘(曾根, 2016)がある。
- 7 障がい理解を促進するプログラムに関する先行研究のレビューを行った Sally&Ashley(2012)によれば、日本における大学生を対象とした「障がい者スポーツ体験」のような複数のプログラムを組み込んだ障がいに関する授業(Curriculum-based intervention)は、諸外国においても安定的な効果が確認されていない。
- 8 諸外国のパラ教育に関する先行研究では、シッティングバレーボールを組み込んだプログラムが児童・生徒の障がい者に対する肯定的な態度の形成に効果的であることが示されている(Panagiotou et al., 2008)。
- 9 「障がい者スポーツ経験」を分析視点として設定している研究もあるが、「障がい者スポーツ経験」よりも「障がい者との接触経験」のほうが「障がい者イメージ」に影響を及ぼすという指摘(曾根, 2016)があることから、本研究では取り上げなかった。
- 10 この点について、例えば河内・四日市(1998)は、「障がい者との接触経験」を家族接触、親戚接触、友人接触、表面接触、ボランティア接触、マスコミ接触の6段階に分類している。

#### 〈引用参考文献〉

- Campos, M.J., Ferreire, J.P., & Block, M.E. (2014) Influence of an awareness program on Portuguese middle and high school students' perception of peers with disabilities. *Psychological Reports*, 115(3): 897-912.
- 石川由美子・金谷京子・村山順吉(2008)「障害」概念を介した障害理解のための拡張的学習の試みⅠ. 聖学院大学論叢, 21: 79-87.
- 河内清彦・四日市章(1998) 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究. *教育心理学研究*, 46(1): 106-114.
- 栗田季佳・楠見 孝(2010)「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果. *教育心理学研究*, 58: 129-139.
- 文部科学省 (online) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告). [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/c-hukyo3/044/houkoku/1321667.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c-hukyo3/044/houkoku/1321667.htm) (参照日 2020年11月20日)
- 永浜明子(2012) アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第Ⅱ報). *大阪教育大学紀要*, 60(2): 31-44.
- 永浜明子・藤村弘子(2011) アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第Ⅰ報). *大阪教育大学紀要*, 60(1): 39-49.
- 内閣官房 (online) ユニバーサルデザイン2020行動計画. [https://www.kantei.go.jp/jp/-singi/tokyo2020\\_suishin\\_honbu/ud2020kkkaigi/pdf/2020\\_keikaku.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/-singi/tokyo2020_suishin_honbu/ud2020kkkaigi/pdf/2020_keikaku.pdf) (参照日 2020年11月20日)
- 日本財団パラリンピックサポートセンター (online) <https://www.parasapo.tokyo/as-uchalle/school/> (参照日 2020年11月20日)
- Panagiotou, A.K., Evaggelinou, C., Doulkeridou, A., Mouratiadou, K and Koidou, E (2008) Attitudes of 5th and 6th grade Greek student toward the inclusion of children with disabilities in Physical Education classes after a Paralympic Education program. *European Journal of Adapted Physical Activity*, 1(2): 31-43.
- Sally, L., & Ashley, E. (2012) A systematic review of disability awareness interventions for children and youth. *Disability & Rehabilitation*: 1-24.
- 佐藤紀子(2012)「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. *日本大学歯学部紀要*, 40: 49-56.
- 曾根裕二(2016) アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響. *大阪体育大学*

- 健康福祉学部研究紀要, 13 : 53-62.
- 杉野昭博 (2007) 障害学 理論形成と射程. 東京大学出版会.
- 角田憲治・大石由起子・永瀬開・藤田久美 (2018) 大学生における障害者スポーツの学習が肢体不自由のイメージおよび障害者スポーツのイメージに与える影響. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 24 : 51-58.
- 角南良幸・鍵村昌範・下園博信 (2014) 大学体育における障害者スポーツ体験が大学生の障害者スポーツに対する意識に及ぼす影響について. 体育・スポーツ教育研究, 15(1) : 25-32.
- 東京都教育委員会 (online) スマイルプロジェクト. <https://www.o.p.edu.metro.tokyo.j-p/smile-project> (参照日 2020 年 11 月 20 日)
- 内田若希・大谷まや (2013) 障害者スポーツ実習と障害擬似体験における障害理解の差異の検討. 障害者スポーツ科学, 11(1) : 33-41.
- 吉岡尚美・内田匡輔 (2009) 体育学部生の障害のある人とスポーツに対する認識の変化について第2報. 東海大学紀要体育学部, 39 : 69-74.

(2021 年 1 月 26 日受理)